

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13711

研究課題名（和文）権威主義体制の展開と中国国民党&lt;青年兵士&gt;の生活過程：1949～1987年

研究課題名（英文）Kuomintang Soldiers' Life Experience in Taiwan's Authoritarian Era: From 1949 to 1987

研究代表者

張 龍龍 (ZHANG, LONGLONG)

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：80844141

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国内戦で台湾へ渡った当時20歳から25歳（1924年から1929年出生）の国民党兵士（以下、<青年兵士>）を対象に、これまでの90年にわたる<青年兵士>のライフコースを研究射程に入れつつ、とりわけ1949年（大撤退、戒厳令布告）から1987年（戒厳令解除）にいたる<青年兵士>の生活過程を記述し、その動態をマクロ次元での権威主義体制の展開と、ミクロ次元での<青年兵士>と戦友・家族による生活戦略の両者から解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義と社会的意義は、つぎの3点である。

まず、本研究は、これまで看過されていた、台湾戒厳令時代における中国大陸籍軍人の社会史を明らかにした。つぎに、1950年代から1980年代における<青年兵士>の生活史は、戒厳令解除以降の台湾社会を理解するための原点となる。さらに、<青年兵士>を主体とする大陸籍軍人への差別は、現代台湾の外来者に対する排除構造の源となる。総じていえば、1990年代、いわゆる民主化の道を歩み始めて以降の台湾社会を考察するには、まず、それ以前の権威主義体制の最前線に立たされた大陸籍軍人の社会史を理解しなければならない。

研究成果の概要（英文）：In 1949, the Kuomintang army suffered a major defeat in the Chinese Civil War, and approximately 1.2 million mainlanders moved to Taiwan with KMT authorities, which is known as “the Great Retreat.”

This study sets the army soldiers who were 20 to 25 years old (born from 1924 to 1929) at the time of the Great Retreat as a cohort and names them “youth soldiers.” This study put the whole life course of “youth soldiers” into the research range, especially linked the life strategies of “youth soldiers,” their comrades-in-arms, and their families with the development process of the authoritarian regime to clarify the life experiences of “youth soldiers” during the Martial Law era (from 1949 to 1987). “Youth soldiers” encountered the Great Retreat during the transition to adulthood. They suffered a more and longer-term negative impact on their subsequent lives from the authoritarian regime.

研究分野：家族社会学、ライフコース研究

キーワード：権威主義体制 台湾 中国国民党 &lt;青年兵士&gt; 生活過程 戒厳令時代

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題名は、「権威主義体制の展開と中国国民党〈青年兵士〉の生活過程：1949～1987年」である。

### (1) 本研究課題の申請時における動機

本研究は、課題代表者の博士論文(2019年)「中国残留孤児第二世代の移住と定着：政策の展開と家族戦略・ライフコース」(2023年御茶の水書房より出版)から着想を得ている。残留孤児第二世代の移住に関する政策は、短期間のうちに変更を繰り返し、その変更のたびに移住条件は変更された。残留孤児第二世代の半強制的移動と比較して、成人移行期における強制的移動と、政策が変更を繰り返していくなかで生活経験は、人びとの人生過程をいかに影響し続けるのか、また彼らの選択の集積は社会の進展にどう影響を与えるのか、といった問題意識を抱くにいたった。それを実証すべく、中国近代史上最大の人的移動となった渡台の国民党兵士に注目した。

### (2) 歴史的経緯と本課題の学術的背景

本研究の内容に関する歴史的経緯に触れておくと、1949年、蒋介石が率いる中国国民党軍は、第三次中国内戦で敗北した。同年、約120万人が、国民党政権とともに中国大陸から台湾に移動した。これは中国近代史上最大の人口移動であり、台湾大撤退(以下、「大撤退」と呼ばれる。大撤退の120万人のうち、半数は軍人である。

1949年5月、国民党政権は台湾全域に対して戒厳令を布告した。1950年4月には軍隊や軍事機関において政工制度が施行された。1952年1月に『戡乱時期陸海空軍軍人婚姻条例』が施行された。同法律は通常、「禁婚令」と呼ばれており、それにより士官兵は結婚を禁じられた。1950年代半ばには、士官兵は退役年齢に達し、退役を迎えるはずであった。しかし、台湾当局は「優待政策」を施行し、それによって士官兵は半強制的に「希望留営」に署名させられ、服役し続けることになった。その後、1959年になって大陸籍軍人の退役上限年齢が設定され、同年に「禁婚令」も廃止された。1979年に中華人民共和国中央政府が『告台湾同胞書』を発表し、海峡兩岸が対峙局面を終息させ、一日も早く通航と郵便サービスの提供を実現させるよう呼びかけた。しかしながら、台湾当局はいわゆる「スリー・ノーズ」政策を実施し、中国大陸に対する敵対姿勢を堅持した。そして、1987年7月、38年にもおよぶ戒厳令が解除された。これにより、士官兵など大撤退を経験した外省人は、ようやく大陸の家族との通信ができるようになった。本研究では、1949年の戒厳令布告から1987年の戒厳令解除までの期間に、大陸籍軍人を主要対象に施行された一連の措置、政策と制度の集合体を権威主義体制としてとらえる。

大撤退を経験した大陸籍軍人に関する研究は、2000年代に進化した新しい研究テーマである。研究が進化した契機として、1990年代に発生した台湾社会変革および1990年代後半以降に進んだ眷村消滅への危機意識がある。2000年代以降、眷村保存と眷村文化遺産に関する研究が蓄積された。しかしながら、眷村という場所・空間研究と比較して、大陸籍軍人の生活史自体に関する研究はきわめて少ない。これまでの研究では、1949年に渡台した大陸籍者について、1980年代までは政治・文化・社会経済的地位において優位性をもつ台湾社会のマイノリティであると指摘している。しかし、大陸籍者はかならずしも全員が優位性をもっていたわけではない。低階級の士官兵は、軍隊の権威主義体制の影響を長期的に受けた人びとである。

## 2. 研究の目的

本研究では、1949年の大撤退時に20歳から25歳(1924年から1929年出生)であった士官兵をひとつのコーホートとして設定し、このコーホートを〈青年兵士〉と名づける。彼らは、成人期への移行において大撤退に遭遇した。また権威主義体制は、彼らのその後の人生経験に長期的かつマイナスの影響をおよぼしつつあった。

本研究の目的は、これまでの90年にわたる〈青年兵士〉のライフコースを研究射程に入れつつ、とりわけ1949年(大撤退、戒厳令布告)から1987年(戒厳令解除)にいたる〈青年兵士〉の生活過程を記述し、その動態をマクロ次元での権威主義体制の展開と、ミクロ次元での〈青年兵士〉と戦友・家族による生活戦略の両者から説明することにある。

## 3. 研究の方法

本研究の調査対象は、台中エリアにある一眷村で暮らす〈青年兵士〉である。かつて1万人以上の〈青年兵士〉が同村で暮らしていたが、2020年4月本研究課題開始当時、約40人が健在であった。本研究は彼ら全員をインタビュー調査対象とした。

分析にあたって、本研究は遡及データと逐次データを用いた。遡及データとは、対象者に過去の生活を振り返って語ってもらったデータである。また〈青年兵士〉は、大陸の親宛に手紙を書き続けたにもかかわらず、戒厳令時代には投函できなかった。これらの個人的記録は、逐次データにあたる。以上の2つのデータ分析を通して、戒厳令時代における〈青年兵士〉の生活過程を明らかにした。

## 4. 研究成果

### (1) 主要な成果

1949年の大撤退から1987年の戒厳令解除・大陸一時帰郷許可までの期間における<青年兵士>のライフイベント 兵役、家族形成(戦友パートナー同居を含む)、退役、就職、一時帰郷のタイミングと形態は、権威主義体制によって強く規定された。表1は、<青年兵士>のライフコースを表したものである。この表を参照しながら、1949年から1987年までにおける<青年兵士>の生活過程をまとめよう。

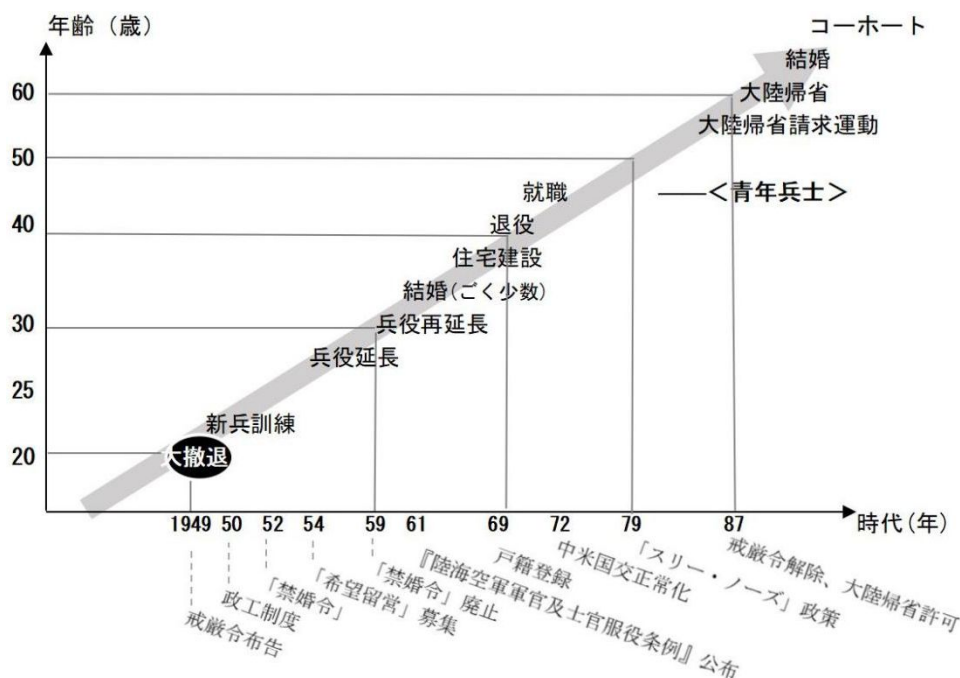


表1 <青年兵士>のライフコース

1950年代、台湾当局は、「大陸反攻」達成という標語の宣伝に加え、「政工制度」、「禁婚令」を実施した。これらの標語や制度、法令がいずれも台湾に渡った国民党軍を直接対象とし、とりわけ成人期への移行における<青年兵士>の思想と行動を極度に束縛した。「大陸反攻」標語、「政工制度」、「禁婚令」、半ば強制的な「希望留営」の募集は、<青年兵士>が20歳代から30歳代前半で経験すべき退役、就職、家族形成などのライフイベントを10年以上遅らせた。権威主義体制と、それによる<青年兵士>の不安定な生活と意識は、彼らの人生設計にもっとも重要な時期を無駄にした。

以上のように、権威主義体制は、<青年兵士>の軍隊生活を過剰に延長した。それによって、<青年兵士>は、20歳代において期待される人的資本と財産をほとんど形成することができず、台湾の結婚市場から除外された。それに加え、彼らは、1960年代後半から1970年代前半に40歳代前半という年齢で退役したため、軍人から社会人への役割移行があまりにも遅かった。

<青年兵士>は、退役後のライフコースについても、権威主義体制の延長線にある「退輔会」の支援制度によって、士官兵・低階級の軍官と中等階級以上の軍官との間に明確な分断線が引かれた。彼らは人生の半ばに差しかかってはじめて軍隊を離れた。それでも、台湾経済の高度成長の開始というタイミングと、「退輔会」の支援、または元戦友間や眷村内のネットワークを活用することで、就職することができた。しかし、選択できる職種が限られたため、ごく少数の者を除き、ほとんどの者が「退輔会」の支援の有無を問わず、単純労働に従事せざるをえなかった。<青年兵士>は、成人期への移行の遅れの後遺症を生涯引きずったのである。

1987年7月、38年にもおよぶ戒厳令が解除された。そして同年末、大陸一時帰郷政策は実施された。<青年兵士>は60歳代という特定の年齢で大陸への一時帰郷を経験し、貯金を使い果たした。

総じていえば、台湾大撤退、権威主義体制という強制的暴力・大規模な社会的混乱が、20歳代の<青年兵士>のライフコースに深刻な攪乱をおよぼし、かつ彼らのその後の人生経験に、長期的な影響をおよぼしつづけている。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の国内外における位置づけは、つぎの3点にまとめることができる。まず、本研究は、これまで看過されていた、台湾戒厳令時代における中国大陸籍軍人の社会史を明らかにした。つぎに、1950年代から1980年代における<青年兵士>の生活史は、戒厳令解除以降の台湾社会を理解するための原点となる。さらに、<青年兵士>を主体とする大陸籍軍人への差別は、現代台湾の外来者(東南アジア系労働者等)に対する排除構造の源となる。

総じていえば、1990年代、いわゆる民主化の道を歩み始めて以降の台湾社会を考察するには、まず、それ以前の権威主義体制の最前線に立たされた大陸籍軍人の社会史を理解しなければなら

らない。本研究はその社会史を解明したものである。

### **(3) 今後の展望**

今後の主な課題は、1987年の戒厳令解除以降における〈青年兵士〉の生活過程を、政策の展開、政権交代、台湾海峡兩岸の社会変遷と連結しながら考察し、個人の発達過程と社会変動との相互関係を解明することである。さらに第二世代(〈青年兵士〉の子どもたち)の成人期への移行過程と家族戦略、ヒューマン・エージェンシーも、今後の研究射程に入れたい。

以上

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 張龍龍	4. 巻 10
2. 論文標題 台湾における大陸籍<青年兵士>の定着：1960年代から1970年代の家族形成、退役、就職を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 273-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Longlong ZHANG	4. 巻 9
2. 論文標題 Youth Mainlander Soldiers of the Great Retreat and Their Interrupted Lives under the Authoritarian Regime of Taiwan in the 1950s	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 265-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 張龍龍	4. 巻 1
2. 論文標題 清泉崗忠義眷村の発展史：1949-2019	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 眷村与大陸籍老兵生命歷程的社會学研究	6. 最初と最後の頁 1-361
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張龍龍	4. 巻 2
2. 論文標題 台湾大撤退青年兵士の生命歷程：原清泉崗裝二師通信兵的口述記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 眷村与大陸籍老兵生命歷程的社會学研究	6. 最初と最後の頁 1-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張龍龍	4. 巻 3
2. 論文標題 台湾大撤退の大陸籍<青年兵士>と中断された人生 成人移行期における強制的移動と兵役経験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 眷村与大陸籍老兵生命歷程的社會学研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張龍龍	4. 巻 4
2. 論文標題 清泉崗眷村訪談録：老兵、眷村媽媽、第二代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 眷村与大陸籍老兵生命歷程的社會学研究	6. 最初と最後の頁 1-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Longlong Zhang	4. 巻 11
2. 論文標題 The Homecoming Practice of Youth Mainlander Soldiers in Taiwan: Silence, Protests, and Homecoming in the 1980s	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 195-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 張龍龍	4. 巻 5
2. 論文標題 台湾大陸籍国民党兵の婚姻与家庭：嫁入眷村的女性的口述記錄	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 眷村与大陸籍老兵生命歷程的社會学研究	6. 最初と最後の頁 1-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 張龍龍
2. 発表標題 台湾における大陸籍 < 青年兵士 > の帰省をめぐる実践：1980年代の沈黙、反発、そして帰省
3. 学会等名 日本移民学会（第32回年次大会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Longlong Zhang
2. 発表標題 Delayed Transition to Adulthood of Youth Mainlander Soldiers in Taiwan: Marriage, Military Retirement, and Employment in the 1960s and 1970s
3. 学会等名 The 6th Winter Conference of the Japanese Association for Migration Studies
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ZHANG Longlong
2. 発表標題 Kuomintang Soldiers of the Great Retreat and Their Interrupted Lives under the Authoritarian Regime in Taiwan
3. 学会等名 The 5th Winter Conference of the Japanese Association for Migration Studies
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 張龍龍
2. 発表標題 台湾戒厳令解除以降における大陸籍 < 青年兵士 > の生活過程：一時帰郷、家族形成とアイデンティティ変容
3. 学会等名 日本移民学会（第33回年次大会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------